



「結」の制度で行われる合掌屋根の葺き替え  
© 社団法人岐阜県観光連盟

# 「合掌造り集落」 結の心が生き続ける 白川郷の



規則的に群となって並ぶ白川郷の合掌造り  
© 社団法人岐阜県観光連盟

平成7年に、富山県<sup>ごかやま</sup>五箇山とともに世界遺産に登録された岐阜県にある白川郷<sup>おがまち</sup>荻町の合掌造り集落。奥深い里山に茅葺き屋根の家屋が集落をなし、何百年も前から代々の家族が暮らしてきた歴史があります。

荻町集落の主体をなす伝統的建造物群の建築物は「合掌造り」の家屋であり、その周囲の田畑、山林、道路、水路等すべてを保存対象とし、農山村特有の歴史的景観を維持しています。

「合掌造り」とは、「木材を<sup>はり</sup>梁の上に手の平を合わせたように山形に組み合わせて建築された、勾配の急な茅葺きの屋根を特徴とする住居で、小屋内を積極的に利用するために、<sup>きす</sup>又首構造の切妻造り屋根とした茅葺きの家屋」のことで、日本の他の地域には見られない、白川郷と五箇山地方のみに存在するたいへん特色のある民家の形式です。

合掌造りが日本の一般的な民家と大きく違うところは、屋根裏（小屋内）を積極的に作業場として利用しているところです。幕末から昭和初期にかけ白川村では養蚕業が村の人々を支える基盤産業でした。屋根裏の大空間を有効活用するため小屋内を2～4層に分け、蚕の飼育場として使用していました。

また、荻町集落の合掌造り家屋は、勾配が60度近くもある急傾斜の茅葺きの切妻屋根であり、南北に流れる庄川に沿って棟を平行に揃え、同じ形態の建築が規則的に群となって並ぶ様子は極めて印象的な集落景観を形成しています。このような形態は、南北に吹き抜ける風の影響を最小限にしたり、農作以外の産業である養蚕の作業場として、小屋内に広い空間の確保、妻からの通風と採光のために必要なものでした。

同じ合掌造り家屋でも、白川郷と五箇山では土間の取り方や入口の位置が異なり、妻に庇を付ける五箇山<sup>ひさし</sup>に対して付けない白川郷など、地域によるいくつかの相違点も見られます。

合掌造り家屋は、もともとそれほど多く建てられたものではありませんが、特に戦後の経済発展と生活の近代化の中で、その数は急激に減少し、集落の中に残されている合掌造り家屋は現在ではわずかに150棟以下となり、1棟1棟がたいへん貴重な存在となっています。

合掌屋根の葺き替えで見られる村民の協同作業を支える「結」の制度も、茅葺きの家を持たない家の登場で、村内でも少しずつ変わってきていますが、この結の心が村人たちの日々の生活の中で生き続け、世界遺産を支える貴重な心の絆を残しています。

里山のくらしを堪能し、結の制度が残る心の絆を体感するのなら、合掌家屋の宿でのお泊まりがおすすめ。まるで時間が止まったような懐かしいひとときは、感慨深いものがあります。

(協力/岐阜県総合企画部観光交流推進局観光・ブランド振興課)

